

癒しと救いとしての詩作 ——イギリス詩人ウィリアム・クーパーの心の深淵——

了徳寺大学教養教育センター 山内久明

【キーワード】憂鬱症、狂気、自殺未遂、性同一性障害、回心、福音主義、ユーモア、自然

芸術作品はいかにして人の心を癒すのか。了徳寺大学「芸術と健康研究会」が掲げるこのテーマは、第一義的には絵画とその享受者との関係に関わるものとして理解されている。しかしながら、このテーマはそれだけでなく、芸術家の創作心理や創作過程に転化して考えることも可能なはずである。ゴッホ（Vincent van Gogh 1853-1890）やムンク（Edvard Munch 1863-1944）などは興味深い対象となり得よう。このテーマはさらに、視覚芸術としての美術の問題であるだけでなく、文学に置き換え拡大して考えることが可能である、という前提の上に本稿は成り立っている。この前提は、本学での研究会において、夏目漱石（1867-1916）、杉田久女（1890-1946）、種田山頭火（1882-1940）の三人の作家に即して話された大島健一教授の講演（2006年6月22日）によっても正当化される。本稿は、標題にあるイギリス詩人ウィリアム・クーパー（William Cowper 1731-1800）を対象として、慢性的憂鬱症に苛まれた詩人の精神の軌跡と詩人としての生成過程とをたどり、創作の成果と詩人の創作心理・創作過程とを相関的に考察することを試みるものである。

クーパーとは誰か。当該領域外の読者の間では知名度が低いかもしれないが、イギリスならびに英語文化圏においては、さまざまな理由から読み継がれ、研究対象ともなってきた。日本で早い時期にクーパーを取り上げたのは、他でもなく夏目漱石であった。漱石は、帝国大学文科大学3年次在学中に発表した「英国詩人の天地山川に対する観念」（1893、『漱石全集』[岩波書店 1995] 第13巻、21-60頁）の中で、クーパーに9頁を割いている。イギリス文学においては、シェイクスピアを筆頭に、古典の地位を確立した作家の暗黙の序列が存在してきた。その序列の中で考えれば、クーパーは最前列に位置するわけではない。しかしながら、聖書の「経外典」(apocrypha) に対する「正典」(canon) に比せられる古典の序列は固定的とは言えない。対象となる作家の重要度は、テーマに応じて流動的であり得ると仮定して、論究を進めたい。

ヨーロッパ中世の医学説によると、人間は四つの体液（血液、粘液、胆汁、黒胆汁）を持ち、それによって四つの気質（多血質、粘液質、怒気質、憂鬱質）に分類された。その一つである「憂鬱」(melancholia, melancholy) は、数世紀にわたって芸術作品や文学作品のテーマとなってきた。デューラー（Albrecht Dürer 1471-1528）の「憂鬱」

はもっとも有名な視覚的表象の一つである。シェイクスピアの戯曲にも、「憂鬱」型の人物が複数登場する。17世紀には、ロバート・バートン（Robert Burton 1577-1640）によって、憂鬱の種々相を分類して論じた、奇書とも言うべき『憂鬱の解剖』（*The Anatomy of Melancholy* 1621）が著わされた。またスコットランド生まれのイギリス人医師ジョージ・チェイン（George Cheyne 1671-1743）は、かつて「憂鬱」を「イギリス病」（English Malady）と命名した。19世紀末から20世紀初頭にかけてフロイトが心理学説の膨大な体系を確立したさいにも、「憂鬱」は重要なテーマの一つであった。フロイト心理学に到達するまでの長い歴史を通じて、「憂鬱」の概念は単一ではないが、ヨーロッパの文化、芸術、文学の広い領域にまたがる重要な問題でありつづけてきた。

18世紀後半、いかなる理由によってか、「憂鬱」に取りつかれた詩人がイギリスで輩出した。トマス・グレイ（Thomas Gray 1716-1771）の代表作『エレジー』（*Elegy Written in a Country Church-yard* 1751）は、『新體詩抄』（1882）において「グレイ氏墳上感懷の詩」と題して訳された。七五調を駆使して日本的文脈に置き換えられたこの訳詩は、響きのよさと、洋の東西を超えたテーマの普遍性によって、以来日本でも知られてきた。生涯を通じてケンブリッジに隠棲したグレイの生き方の基調は、イギリス的「憂鬱」の典型と呼ぶことができるが、グレイの「憂鬱」は、病というよりも、社会との関わりを避けるための意図的な自己防衛戦略の趣があった。しかしながら、別の種類の「憂鬱」も存在した。古典的スタイルに装われたみずみずしい感性の詩人として知られるコリンズ（William Collins 1721-1759）は、最晩年に「治療院」で過ごし、そこで一生を閉じた。また、統合失調症の患者として「癲狂院」に収容され、宗教詩の傑作を書いたスマート（Christopher Smart 1722-1771）。さらに、現実の対極としてファンタジーを構築するために中世詩の贋作を発表してのちに自殺したチャタートン（Thomas Chatterton 1752-1770）。これらは、正真正銘の心の病としての「憂鬱」を患った詩人である。また、同時代の文壇に君臨した大文豪サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson 1709-1784）自身、豪放磊落な外観とは裏腹に、慢性的憂鬱症に取りつかれた人であった。先に言及したジョージ・チェインのことばは、まさにこの時代のためのものである。

これら一群の詩人のもう一人としてウィリアム・クーパーは、自殺未遂を繰り返し、慢性的憂鬱症に苛まれながら、隠棲したイングランドの片田舎で、自然を謳歌した長篇詩の傑作を書き上げた。本稿でクーパーを論ずるにあたり、以下のような考察を行なうことが意図されている。(1) クーパーの心の病はいかなる症状を呈したか。(2) クーパーの心の病には、いかなる要因が関与していたか。(3) 心の病を患ったクーパーはいかにして詩を書くに到ったか。(4) クーパーの詩作と心の病にはどのような相関性が認められるか。詩作はクーパーの心の病にとっていかなる効果をもたらしたか。クーパーの心の病は、クーパーの詩のテーマやスタイルにどう関わっているか。(5) 附随

的に、クーパーの詩はイギリス文学の流れのなかでどのような位置づけが可能か。本稿は一種の病跡研究 (pathography) の体裁をとる。生身の人間と分析者との間の対話に依存する精神分析に対して、病跡研究の対象となるのは過去の人であるために、直接の対話は不可能である。本稿で取り上げる対象も、時間的にも空間的にも隔たりのある十八世紀後半のイギリス詩人である。直接の対話に代わるものとして、この詩人によって公にされた作品はもちろん、書き残された私的記録、書簡、伝記的事実などといかに向き合い、それらをいかに読み解くかが論究の鍵となる。

1. 『回想記』——憂鬱と回心

クーパーの憂鬱症の発症には、ある程度の規則性が認められる。最初は 1753 年、1763 年、1773 年と 10 年周期で現れている。第 4 回目は 1787 年と、第 3 回目から数えて 14 年の間隔があき、これには何らかの外的要因が考えられる (後述)。それに対して、1794 年の第 5 回目の発症は、第 4 回目から数えて 7 年目と短く、これにも何らかの外的要因が考えられる (後述)。発症と発症の間にもクーパーは憂鬱症から完全に自由であったわけではなく、絶えず再発の不安に苛まれ、現実との妥協を模索しながら生きていた。

クーパーの憂鬱症の実態を知るために、クーパーが書き残した『回想記』(Memoir) はこの上もなく貴重な記録である。これは、生存中クーパー自身は公にせず、死の 16 年後にはじめて出版された。ということは、クーパーが他人の目を意識して書いたのではなく、内面の記録として書き残していたものであり、それ故に信憑性が高いと考えることは妥当である。

『回想記』は第 1 回目の発症と、特に第二回目の発症を詳細に論じたものであるが、それに先立ち少年時代に遡って自己を語ることから始まる。クーパーは、父親 (John Cowper 1694-1756 ケンブリッジ、オクスフォード両大学で学び、ケンブリッジ大学神学博士で、国王直属の司祭も務めた) が教区牧師を務めるロンドン北方に位置するハートフォード州の田舎町バーカムステッド (Berkhamsted, Hertfordshire) で生まれ育つが、ロンドンの名門私立学校ウェストミンスター・スクール (Westminster School) で寄宿生活を送ることになる。クーパーは学校でいじめの対象となるような繊細な少年であったが、墓堀人が掘り出す頭骸骨を見て人の命のはかなさを感じる。この挿話は『ハムレット』の墓堀の場면을喚起し、憂鬱症タイプのハムレットの連想を伴うとともに、グレイの墓地での瞑想にも繋がるが、少年クーパーの内面的深みを暗示することはあっても、心の病を示すものではない。

それに対して 1753 年の第 1 回発症の記録は明らかに病的な兆候を示している。

法学院に落ち着いて間もなく、私は落ち込んだ気分襲われた。それは経験者で

なければ想像のつかない性質のものである。私は日夜、責め苦に苛まれた。恐れおののいて臥し、絶望のうちに起き上がった。『回想記』8頁)

1748年ウェストミンスター・スクール卒業と前後して、クーパーは法律の資格取得のために、16世紀以来イギリスに存在する四つの法学院の一つであるミドル・テンプル(The Middle Temple)に所属する。その頃クーパーは父方の叔父(Ashley Cowper 1701-88)の家に出入りしていたが、そこには、従妹のハリオット(Harriot のちの Lady Hesketh 1733-1807)とシアドーラ(Theadora 1734?-1824)がいた。クーパーはシアドーラを恋したが、この恋を諦めることになる。クーパーの身分不安定を理由にシアドーラの父が反対したこともあったが、さらに深刻な事情があった。

その事情を、250年以上の時差で隔てられた現在、だれも知ることはできない。『回想記』にも何の言及もない。それはクーパーの「身体的欠陥」(Ryskamp, 135頁)で、「両性具有」と噂されたこともあるが、今日風に言えば、「性同一性障害」ということになる。実証する手立てはまったくないが、それが事実であったとすれば、クーパーの憂鬱症の発症には、内因的根拠があったと言える。

クーパーの「落ち込んだ気分」の記述と同様に印象的なのが、唐突とも思える快復の記述である。

われわれ[クーパー自身と友人]はサウスハンプトンとニュー・フォレストの間に延びる入り江のはずれの丘に腰を下ろした。

まさにここでのことだった。突如として、その瞬間に、もう一つ別の太陽が天空で燃え上がるかに思えた——特別に、悲しみと苦しみを取り払うために、私の悲惨の重みがすっかり取り去られるのを感じた。ただちに心が軽くなり、歓びを感じて、私一人だけならば、法悦のあまり感涙に咽んだであろう。(9頁)

唐突な快復を体験したクーパーはその時点では、快復を「転地」という自然の治癒力に帰していた。それに対して、『回想記』が書かれた——後述のように、福音主義の信仰への帰依という宗教的回心を経たあとの——時点では、快復を神の恩寵に帰し、かつて自然の治癒力に帰した自らを戒め批判する。

『回想記』が主として扱うのは1763年の第2回目の発症である。それに先立ち、第1回目の発症から快復したあと、クーパーは1754年に法廷弁護士資格を取得、ただし一度として開業することはない。1757年には、ミドル・テンプルからイナー・テンプル(The Inner Temple)に移籍。1763年、事件はそこで起こった。発端は、貴族院書記が急死することがあれば、後任としてクーパーを推挙するとの冗談からはじまる。この冗談は、書記が急死したために現実となる。『回想記』でクーパーは次のよ

うな解釈を加える。

こうして、欲してはならぬと神がお命じになったものを自分は欲したのである。・・・私が渴望するものを神はお与えになり、そのことにおいて、そしてそれによって、私の罪に対する罰をただちにお与えになることが神の御意になったのである。

ここでも回心後に書かれた『回想記』の著者としてのクーパーは、自身の体験に対して宗教的解釈を施しているが、俗な言葉で言えば「後ろめたさ」と呼べる「罪」意識である。クーパーは、「人前に立たないで」職に就けると考えていた。この安易な思い込みには、それとは裏腹に、職責の重さと自分自身の能力との乖離の自覚に起因する「恥」の意識が潜在している。さらに新しい事態が継起し、問題は複雑化する。もう一つ別の、より有利な貴族院書記職が空席となり、有力な縁者から推挙されたクーパーの悩みは深刻化する。第一に、縁故により推挙された自分が他の候補者を犠牲にすることに対する「罪」意識が働く。第二には、「これほど人前に立つ性質の仕事遂行する能力が自分にはないことに対する反省」(14 頁) なしに職を得ることに対して、「罪」の意識と同時に、「恥」の意識が二重に増幅され、クーパーは「深く落ち込む」(14 頁)。クーパーは辞退することで解決をはかろうとするが、縁故による推挙であることが判明すると、辞退を許されないばかりか、公式の査問を課されることになる。事態は能力不足の自覚に起因するクーパーの「恥」意識に決定的打撃を与える。「いかなる場合にも、・・・人前に曝されることは死に至る毒」(15 頁) に等しかった。

朝目覚めて私が思ったことは、そら恐ろしく、悲惨この上もなかった。遠からぬ冬を思うと、刻々と迫り来る、時の流れが恨めしかった。激流に吞まれて荒海に押し流される一人の男の観があった。もはや元には戻れず、荒海に出れば生きては還れぬことがわかっていた。(16 頁)

難破と水死は、最晩年の詩（「見棄てられた水夫」‘The Castaway’ 1799）に到るまで、クーパーの作品に一貫して用いられるイメージである。

クーパーは憂鬱症の典型的な症状を呈している。

私はますますむっつりとして殻に籠り、親友さえも含めてあらゆる付き合いを避け、自室に閉じ籠った。(18 頁)

クーパーは「発狂のみが唯一残された道」(17 頁) と考えるに到る。発狂すれば就職

に不適格となり、悩みから解放されるはずである。しかしながら、待ち望んでも発狂はしない。そこでクーパーは、「死に対する不安と和解して」(18 頁) 自殺を試みることになる。

自殺を試みる直前のクーパーは、まちがいなく被害妄想に陥っている。

・・・新聞を読むと、よく読めば読むほど自分の注意を惹く一通の手紙が載っていた。今ではその趣旨を思い出せないが、全部読み通すまでもなく、それが自分に対する中傷ないしは皮肉であることは一目瞭然であった。手紙の主は、私の自殺の目的を知り尽くしていて、私の自殺を確実にし、早めるためにその手紙を書いたように思えた。(19～20 頁)

さらに興味深いのは、クーパーが妄想の中で仮想された架空の迫害者の心理に言及して、「私は内心で言った、『君の残忍な望みは叶えられが、君は復讐を受けることになるさ』」(21 頁) と言っていることである。すなわち、相手の望みどおり自分は自殺するが、それは相手が復讐を受けることに等しい、という論理である。自殺とは、他者に対する攻撃性が、自己に向けられたものであるという定義に見られるように、自虐性と加虐性の共存がクーパーの言葉からも読み取れる。

クーパーはハムレットのように、「死への願望と死に対する恐怖」(21 頁) との間で揺れ動いていた。心理学説によれば、自殺と自殺未遂とは別物であるとされる。後者の場合には、救助信号が発せられる。『回想記』にあるように、自室の扉の門が、「かけておこうとの意図に反して、外されたままにしてあった」(24 頁) ことは、助けを求める意志がクーパーに最初からあったことを暗示する。この意味で、クーパーの場合、本来的に自殺ではなく、自殺未遂の症例であったとすることができる。

自殺未遂のあとの混乱した心理状態で、クーパーは幻覚を体験する。

ある朝、夢うつつの状態で横になっていたとき、私はウェストミンスター寺院の中を、祈りの時間が始まる前に歩いているように感じた。ほどなく司祭の声が聞こえたように思え、聖歌隊席の方に急いだ。まさに入ろうとした途端、オルガンの下鉄扉が軋みながら、私の顔めがけてパターンと閉まり、院内に響き渡った。(28 頁)

自殺に失敗したクーパーが、恐怖、罪悪感、絶望から救われる唯一の道は「発狂」(32 頁) しかない。抑鬱から狂躁への劇的な転換は、フロイトによれば、「メランコリアの顕著な特徴」(‘Mourning and Melancholia’, Complete Works, XIV, 253.) であるが、クーパーは次のように回想する。

強烈な殴打が頭蓋骨に触れずに脳を直撃し得るとしたら、私が受けた衝撃がまさにそれであった。私は額に手を当て、痛さのあまり絶叫した。

一撃ごとに私の思考と言葉は常軌を逸し、支離滅裂になっていった。荒れ狂うのが一段落すると、混沌と妄想だけがあとに残った。はっきりしているのは、罪の意識と劫罰の予感だけであった。(32 頁)

「罪の意識」と「劫罰の予感」という表現が、他の類似の表現とともに 1763 年当時に遡るものであるか、『回想記』執筆時につけられた説明であるかの断定はむつかしいが、少なくとも潜在的に、自己の憂鬱と狂気を宗教的枠組みの中で考える下地が、クーパーには備わっていたことが窺える。

クーパーはロンドン北郊、かつてのローマ軍駐屯地の遺跡が残り、大聖堂の所在地としても知られるセント・オーバンズ (St. Albans) の「治療院」に送られる。その主宰者ナサニエル・コットン博士 (Nathaniel Cotton 1705-1788) は、医師であると同時に福音主義の信奉者として知られた。福音主義は英国国教会内部の宗派でありながら、カトリック寄りの高教会の対極に位置し、教義や典礼よりも福音書を拠り所とする個人の信仰を重視し、奴隷貿易廃止の主張や、社会奉仕の実践で知られた。コットン博士の庇護のもとでも、最初の 8 ヶ月、クーパーは「自己嫌悪」「罪の確信」「差し迫った審判の予感」「神の慈悲が得られないとの絶望感」(33 ～ 34 頁) に苛まれていた。1764 年 7 月、ケンブリッジ大学ベネット・コレッジ (Bene't [今日の Corpus Christi] College) のフェローであった弟のジョン (John Cowper 1737-70) が見舞いに訪れていたさいに、クーパーは突如として心の重圧が取り除かれるのを感じる。「希望の光らしきものが突如として心に射し込み」、「はじめて心に歓びを抱いて起き上がった」(38 頁)。「あんなにも長く垂れ込めていた恐怖の雲が刻々と雲散霧消していった。一瞬一瞬が希望に満たされてやってきた」(39 頁)。

私にはめられた枷を取り払い、キリストにおいて体現された有り難き神の溢るる御慈悲に到る道の開かれた幸せな時が到来した。・・・

ただちに、私にはそう信ずる力が与えられた。ただちに、私には正義の日の光が降り注いだ。私にはわかった——キリストの贖罪の十全さと、キリストの血で印璽された私に対する赦しと、私の正しさの証明が完全無欠であることが。

奈落の底からの唐突な快復に対するクーパーの説明は、徹底して宗教的である。

クーパーが辿った精神の軌跡は、ウィリアム・ジェイムズ (William James 1842-1910) が『宗教的体験の諸相』(*The Varieties of Religious Experience: A Study in*

Human Nature [Gifford Lectures 1901-1902]) において、「病める魂」、「分裂した自我」、「再生」、「回心」などの言葉で論じた典型的症例と合致する。ジェイムズによると、「回心」体験の前段階として、「自己欠陥意識、くよくよと考え込むこと、落ち込み、病的なまでの内省、罪意識、来世に対する不安、懷疑による苦悶」(199 頁) などが挙げられている。クーパーに見られる、絶望から神の慈悲を信ずることへの移行の唐突さは、ジェイムズが指摘する「回心」体験の特徴と合致する。極度の絶望のあげく、「絶望に対してあまりにも慣れてしまい、そのことに対して無反応・無関心になってしまった」(『回想録』37 頁) クーパーの状態は、ジェイムズの言葉で言えば一種の「自己放棄」であるが、これこそ「宗教的生活における決定的転換点」(210 頁) に他ならない。

『宗教的体験の諸相』は、アメリカから招かれて大西洋を渡ったジェイムズ(弟のヘンリー [Henry James 1843-1916] は小説家としてイギリスで地位を確立中であった)が、1901 年～1902 年、エディンバラ大学において行った講義に基づいている。同じ頃ロンドン留学中の夏目漱石はその講義に列席することこそなかったが、ロンドンで購入された同書は、東北大学所蔵の「漱石文庫」に今も残る。18 世紀のクーパーの体験は、20 世紀に入ってジェイムズの学説を介して普遍的意味づけが可能になり、さらにジェイムズの読者であり、自身病める心の持ち主であった漱石にも繋がる。ちなみに、イギリス文学を専攻する学生時代の漱石が、論文の中でクーパーを取り上げていることについては最初に触れた。

本題に戻ると、『回想記』は快復後のクーパーの生活の、予期しなかった新しい局面の展開で結ばれている。1765 年夏、セント・オーバンズのコットン博士のもとを離れたクーパーは、弟ジョンの世話で、ケンブリッジ近郊のハンティンドン (Huntingdon) に下宿する。そこで出会うのがモーリー・アンウィン牧師 (Rev. Morley Unwin 1703-67) とその一家——妻のメアリー (Mary 1724-96)、息子のウィリアム (William 1744-86)、娘のスザンナ (Susanna 1745-1834) ——である。ウィリアムがケンブリッジの学生になると入れ代わりに、クーパーはアンウィン家に寄寓することになる。アンウィン牧師もさることながら、それ以上に、コットン博士のもとで深めていた福音主義の信仰を介して、クーパーはメアリーとの共感を深めて行く。

その共感とはどのようなものであったか。若い日、従妹シアドーラに対するクーパーの愛の挫折について、それがクーパーの身体的欠陥によるものであった可能性について、また、それがクーパーの憂鬱症の発症の一因であり得たことについてもすでに触れた。貴族院書記職をめぐる躓きに見られるように、社会的適応に問題があるのと同様に、クーパーにとっては、男性として女性との関係を確立することには高い障壁があった。そう考えると、メアリーはクーパーにとって、クーパーが幼い日夭折し、クーパーの心の奥底に記憶が深く刻み付けられていた母(晩年 [1790 年] クーパーは母方の従妹から母の肖像を寄贈されて感動し、母の追憶を詩につづる)の代役として、

あるいは姉として、保護者のような女性だったのではないかと推測される。そして男女の性を越えたメアリーとの不思議な関係は 30 年以上にわたって続くことになる。

2. オーニーにて——ジョン・ニュートン、メアリー・アンウィン、オースティン夫人

寄寓先の当主アンウィン牧師は 1767 年落馬して死亡するが、クーパーは残された家族と同居を続ける。同じ頃クーパーは、当時、福音主義派の牧師として著名なジョン・ニュートン (John Newton 1725-1807) に紹介された。翌年 2 月には、ニュートンが教区牧師を務めるバッキンガムシャーのオーニー (Olney, Buckinghamshire) に、メアリー・アンウィンとともに移り住む。オーニーという町は、クーパーがそれまで住んだハンティンドンから南西に約 40 キロ、ロンドンから北北西に約 80 キロ離れている。18 世紀半ば、人口約 2000、レース製造業の営まれる町であった。町に沿ってウーズ川 (Ouse) が流れ、和やかな自然の風景に取り囲まれている。クーパーにとって、この田舎町で暮らすことは、完全な社会放棄ではないが、精神の安定のために社会の喧騒を避けた生き方であった。

クーパーがその精神的指導に身を委ね、その深い影響の下におかれたジョン・ニュートンは波乱に満ちた前半生ののちに、回心体験を経て英国国教会の牧師となった人である。自伝『真実の物語』(An Authentic Narrative, 1764) は、家業の船舶業を継いで、三角貿易と呼ばれたイギリス、アフリカ、アメリカを繋ぐ奴隷貿易船の船長として、1736 年にはじまり、1742 年までの間に 6 度大西洋を航海し、荒海で何度も生命を落としかけた経験を語る。1750 年に結婚してのちも、さらに 3 度の航海に出ているが、1754 年に生死の境をさまよう病を得てのち、海に出ることを止め、5 年間リヴァプールで潮位観測士の職に就く。その間に、ギリシャ語、ヘブライ語、神学を独学。牧師職を志し、1764 年叙任され、オーニーのセント・ピーター・アンド・セント・ポール (Parish Church of St. Peter and St. Paul) 教会の教区管轄副司祭として着任し、1780 年、ロンドンのセント・ウルノス (St. Woolnoth) 教会に転出するまでここに留まる。

1763 年の憂鬱症の発症のあとに続くクーパーの体験が宗教的回心と呼べるように、ニュートンの前半生と後半生とを分けるものも、さらに劇的な宗教的回心であった。そして両者に共通するのが、福音主義の信仰である。信仰を通じて、ニュートンはクーパーにとっての師であった。クーパーの詩才が一気に開花するのはさらに後年のことであるが、この時期にクーパーはニュートンの影響下で讃美歌を書いている。これらはのちに、ニュートンの讃美歌と併せて、『オーニー讃美歌集』(1779) として出版され、その中には英国国教会で今も歌われるものも含まれている。

今日、世界中で知られる「アメイジング・グレイス」(‘Amazing Grace’「驚異の恩寵」) の歌詞が『オーニー讃美歌集』に含まれ、作詞者がジョン・ニュートンであることは、

歌の知名度に比較して、あまり知られていない事実かもしれない。ただし、英国国教会においては、司祭と会衆との間での応答による詠唱歌（chanting）として歌われ、今日のメロディーでは歌われていたのではない。この讃美歌がアメリカに伝播して、南部の農場における黒人労働者の黒人霊歌の一つのメロディーを転用して歌われるようになり、それが「アメイジング・グレイス」として定着したのである。ニュートンもクーパーも真摯な奴隷貿易反対論者であったことと併せて、この事実は興味深い。

讃美歌は当然ながら公的性格を持つものでありながら、『オーニー讃美歌集』には作詞者の個人的体験が深く関わっているものが含まれる。1773年1月、クーパーは再び憂鬱症を発症し、10月にはまたしても自殺を試みる。この第3回目の発症の予感の中で書かれたとされるのが讃美歌「闇の中から射す光」（‘Light Shining out of Darkness’）で、大意は以下のとおりである。「神の御業は神秘なるもの／驚異をもたらすための。海をお渡りになる神は／嵐にお乗りになる。// 測り知れぬ鉞脈の奥深くで／神の御技は損われることなく、／光り輝く目論見を積み上げられ／主としての御心を行われる。// 怖れを抱く選ばれし者たちよ、勇気を持て、／そなたたちがかくも怖れる雲は／慈悲に満ち、千切れるのだ／そなたたちの頭上に祝福をもたらして。// 過てる感覚で、主を裁断するなかれ、／神の恩寵を信ぜよ、／神の恩寵は顔こそ厳しくとも、／その下には笑みが隠されている。// 神の目論見が熟すのは速く／刻一刻と開く。／蕾の味は苦くとも／花は甘美なもの。// 盲目の不信は必ず過ち、／神の御業を見損なう。／神を解き明かせるのは神自身のみ、／神のみが自らをお示しになる。」4行連句で書かれたこの讃美歌は、神の恩寵を認識し、救いの予感から回心に到る心境を歌っている。

1773年における自殺未遂にいたるクーパーの第3回目の発症は、その前の年、庇護者としてのメアリーと婚約した直後のことであった。本来ならば喜ばれるべきメアリーとの婚約によって発症が触発されたことは何を意味するのであろうか。メアリーとクーパーとが、母と子、姉と弟の役割を演じている限り、二人の関係は安定したものであり続けたはずである。しかしながら、その先に結婚が控えた婚約となると、話は別であった。

この時期に書かれた詩の一つに、「憎悪と復讐、神が課し給うた私の永遠の運命」（‘Hatred and Vengeance, my Eternal Portion’）がある。「憎悪と復讐！神が課し給うた私の運命は／刑の執行を待ち得ず、／猶予することなく、待ちきれずに、私の／魂を瞬時に捉えようとする。// ユダよりも呪われた存在、ユダよりも疎まれた存在、／小銭で主を売ったユダよりも。／イエスは私を二度見棄てられた、最悪のならず者、／もっとも穢れた私を。// 人からも、神からも見限られ見放された私、／地獄こそが私の悲惨の隠れ家、／だが地獄さえもがその貪欲な口を／私に対して門をかけ閉ざしている。// 辛い運命！幾千もの危険に囲まれ／疲れ果て、気も失わんばかりに、幾千も

の恐怖に震え、/ 打ちのめされて、宣告を受ける私の運命は / アビラムの運命よりもさらに恐ろしい。// アビラムは、怒れる正義の断罪の杖が、/ 生身のまま地殻の中心へと送り、叫びながら真逆さまに落ちて行った。/ 私は審判の糧を与えられ、生身のまま墓場に / 地上で埋められているのだ。」この心境は、ミルトン（John Milton 1608-1674）の『失樂園』（*Paradise Lost*, 1667）で、原罪を犯したあと楽園追放を待つまでのあいだ、生ける屍として生きつづけるアダムの苦しさに酷似する。

メアリーとの婚約とその先にある結婚が、性同一性障害であったと推測されるクーパーにとって精神的負担として耐え難いものであったことは想像に難くない。しかしながら、それだけでなく、クーパーが身体的障害ゆえに、自らをユダよりもさらに呪われた存在として意識していることは注目に値する。これは、ニュートンを介して深められたクーパーの信仰の袋小路とも言える。クーパーにとってニュートンは、福音主義の信仰の体現者として、信仰の上での師であり導き手であり救い主であったはずである。しかしながら、ニュートンが説いた信仰は両刃の剣となる側面があった。ニュートンに代表される福音主義の説教は、人間の罪深さを強調し、地獄のイメージを多用したことで知られ、そのために精神のバランスを崩した信者が出たと言われる。それが、上に引用したクーパーの詩に盛り込まれた、罪意識の強調と地獄のイメージに反映されたと推測することは困難ではない。

広い世界からは隔離されオーニーという田舎町で、一方でニュートンの厳しさと、他方でメアリーの精神的愛を受けながらひっそりと暮らしていたクーパーの生活に、1780年から数年の間に転機が訪れる。まず1780年6月に、ニュートンがロンドンのイースト・エンド地区の、かつて漁師たちの礼拝の場であったセント・ウルノス教会の司祭として転出する。一面でクーパーは精神的支柱を失った反面、他方で管理と抑圧から解放され、自立への自覚が促される側面があったと推測される。

翌1781年7月、一人の女性がクーパーとメアリーの前に現れる。元の名はアン・リチャードソン（Ann Richardson）、30歳年上の男爵ロバート・オースティン（Robert Austen 1708-1772）と結婚したオースティン夫人（Lady Austen 1738?-1802）は、夫とともにフランスで暮らし、イギリスとの間を行き来していたが、夫の死後もフランスとイギリスの上流階級と交わりがあった。憂鬱症の再発を恐れながら、世を避けて生きるクーパーとは異質な世界で生きてきた女性である。たまたまオーニーを訪問、滞在した牧師館でクーパーの噂を聞いて対面が実現した。オースティン夫人の観点からクーパーは、知性と教養を備えながら、実社会でのふつうの生活を断念して田舎に隠棲し、メアリー・アンウィンの男女の性を超えた精神的庇護に支えられて生きる、不思議な存在として新鮮に感じられたのではなかろうか。他方、クーパーの観点からは、若い日にロンドンで垣間見ていた現実世界からの使者として、華のある仮想世界を身近に持ち込んできたオースティン夫人が、外の世界に対する眠っていた好奇心を呼び

覚ましたのではなかろうか。クーパー、メアリー、オースティン夫人の三人の間で、不思議な人間関係がつけられていく。

オースティン夫人の出現によってもたらされた状況は自己矛盾を孕んでいた。第一に、憂鬱症を克服し、再発を回避して精神の安定を保つためには、隠遁者としての生き方はクーパーにとって不可欠なものであったが、オースティン夫人が持ち込んだものはそれと抵触しないのか。第二に、オースティン夫人の存在は、クーパーにとってかけがえのないメアリーとの絆に支障を来たすことはないのか。このように、オースティン夫人はクーパーにとって二重の意味で危険を孕んでいたのではないか。

第一の点に関して考えると、クーパーの隠棲は、日本の中世における、例えば『方丈記』の作者の隠遁とは性質が異なっている。クーパーが生きた時代は国内では「囲い込み」と産業革命によってイギリスの農村と都市が大変貌を遂げ、他方ではアメリカの独立やフランス革命とそれに続くナポレオン戦争によって世界的大変動が起こる時代であった。このような歴史的変動や大都会の喧騒に直接関与する機会からは遠ざけられていたが、田舎町の世間が身近に存在し、クーパーもそれに関与していた事実には変わりはない。オースティン夫人との出会いもそのような環境の中で起こったものである。第二の点に関しては、クーパーの安泰のためにかけがえのないメアリーとは異なる意味においてはあるが、オースティン夫人もクーパーの知的・精神的活性化に貢献した。しかしながら、メアリーとオースティン夫人との間で募っていった軋轢により、ついに1784年初夏のころ、オースティン夫人はオーニーを立ち去ることになる。それでは、オースティン夫人はクーパーとメアリーの静かな生活にとって単に夾雑物に過ぎず、邪魔で無意味な存在であったか。事実は逆である。

ここでクーパーの詩人としての生成についての考察が必要となる。『オーニー讃美歌集』の出版は1779年であるが、そこに含まれる讃美歌をクーパーが実際に書いたのはそれに先立つ数年間で、まさにニュートンの宗教的影響の産物であった。それに対して、1780年からクーパーは、18世紀の詩的伝統と呼べる道徳的教訓詩を書き継いだ。すなわち、「談話」(‘Table Talk’)、「誤りの階梯」(‘The Progress of Error’)、「真理」(‘Truth’)、「諭告」(‘Expostulation’)、「希望」(‘Hope’)、「慈悲」(‘Charity’)、「会話」(‘Conversation’)、「隠遁」(‘Retirement’)などである。これらは、1782年3月に出版された『詩集』(*Poems by William Cowper, of the Inner Temple, Esq. 1782*)に収められた。『詩集』の出版はクーパーを有名にし、それが契機となって30年にわたって音信が途絶えていた従妹(Lady Heskethとなったハリオット)との文通が再開されるという副産物がつく。

同じ年の10月、クーパーは『ジョン・ギルピンの滑稽な物語』(*The Diverting History of John Gilpin*)を執筆、11月出版することになる。ある晩、落ち込んだ気分のクーパーを慰めるために、オースティン夫人が滑稽な話を物語ると、それを翌日クーパー

は一気にバラード形式の詩に仕立て上げる。オースティン夫人こそが生みの親であったこの詩は、イギリス国内で想像以上に人気を博しただけでなく、19世紀を通じてアメリカでも版を重ねることになる。クーパー自身、自分が「書いたもっとも馬鹿げた作品」（『書簡・散文集』第2巻、91頁、1782年11月18日、ウィリアム・アンウィン宛書簡）と称したように、この詩は一口で言えば、一種の他愛のない滑稽詩である。

題名にある架空の人物は、結婚20年を祝うために、エドモントン（Edmonton）の旅籠屋「ベル亭」に向けて、ギルピン自身は馬で、妻と家族一同は馬車で出かける。ところがギルピンが制御し損ねた馬は、エドモントンを通り越して16キロ先のウェア（Ware）にまで疾走、そこから再び疾走して無残な姿で帰還する滑稽で荒唐無稽な道中を物語る。オースティン夫人がクーパーの憂鬱を癒すために詩の素材となる話を物語ったことだけでなく、クーパーの作詩行為自体が、クーパーの憂鬱を和らげ癒したことは明白である。憂鬱がユーモアを必要とし、ユーモアが憂鬱を和らげ癒す意味において、憂鬱とユーモアは裏腹であるというフロイトの学説（*Jokes and their Relation to the Unconscious, Complete Works, VIII.*）は、心因性憂鬱症に取りつかれた夏目漱石の『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』に対してと同様に、クーパーの滑稽詩『ジョン・ギルピン』にも適合する。

クーパーの詩作に対するオースティン夫人の貢献はこれだけに留まらない。代表作『課題』（*The Task*, 1783-1784執筆、1785出版）は、オースティン夫人がクーパーに、「ソファ」をテーマにしてブランク・ヴァース（1行10音節、弱強5歩格の無韻詩、シェイクスピアの戯曲の韻文と同形式）で詩を書くことを「課題」として出したのが執筆の契機となった。「私が歌うのはソファ、近年私が歌ったのは／真理と希望と慈悲。私は恭しく弾いた、／厳粛な琴線を、手はわななき、／痛む心で大胆な飛翔を避け、／今や、よりつつましい主題に憩う。／主題はつつましくとも、堂々として誇り高い／契機——なぜなら、この歌は麗人がお命じになったもの」と始まる『課題』の冒頭の18世紀の擬似英雄体で書かれた7行には、イギリスの叙事詩を代表するミルトンの『失樂園』の字句への言及が含まれていることから、クーパーはミルトンのことを強く意識していたことが窺える。ミルトンの叙事詩は伝統を踏襲し、9人の詩の女神の一人であるユレイニア（Urania）が与える靈感に従って書かれているが、クーパーの場合、詩の女神にあたるのが「麗人」、すなわちオースティン夫人である。

しかしながら、「課題」として第1巻の題名となっている「ソファ」について語られるのは最初の8～102行だけである。そのあと『課題』は、「ソファ」のテーマの対極にある「自然」を歌う本題へと移行する。詩作の契機となったオースティン夫人は退場し、メアリーとともに築いた信仰に支えられ、自然と一体化した生活が謳歌されることになる。

3. 『課題』——癒しと救いとしての詩作

『課題』第1巻「ソファ」(The Task, Book I: 'The Sofa')の冒頭の導入部に続く部分(8-102行)が扱うのは人類の椅子の歴史である。原始人が岩に座った太古に始まり、床几を経て背凭れや肘掛のある椅子に変わり、最後に安楽なソファが登場する現代に到る。それは文明の象徴であると同時に、都会における人間の奢侈、安逸、不健康の反映でもあり、それよりも田舎の自然と調和した健全な生活を選ぶことを宣言することにより、詩は唐突に、都会批判と自然讃美の主題へと転調する。紙面の制約上、『課題』の主題を第1巻に限って以下に考察する。

『課題』の中で描かれる自然の風景や庭の描写は、クーパーが隠棲したオーニーとその周辺のものである。一例を、第1巻から引いてみる。(ブランク・ヴァースで書かれた原詩の音節・韻律を日本語に移すことは不可能なので、意味だけを伝える。)

生き証人となりなさい、私の散策の愛しい友よ、
その腕は、この二十年目の冬、このとおり
しっかりと私の腕に組まれているが、喜びとともに——
真価が長年の経験を通じて確認された愛と
試練を経た美德だけが呼び醒ます——喜びとともに。
生き証人となりなさい、あなたが二倍に大きくしてくれた喜びの。
あなたは知っている、私の自然に対する讃美が心底からのものであり、
私の歓喜が呼び起こされるのは
美辞麗句で詩を飾るためのものでなく
真正なものであることを、そしてあなたはすべての喜びを私と共有する。
何としばしば、あの丘の上で私たちは立ち止まり
佇み、そして私たちは物ともしなかった、
あの吹きつける風など、それが吹いていることすら気付かず、
自然を見てそれを愛でる心が膨らんで行き、
いつまでも飽きることなく、その光景に釘付けになったことか。
そこから何と大きい喜びとともに見たことか、
遠くで鋤がゆっくりと動くのを、
まっすぐに耕された一筋の畝から逸れることのない馬のそばで
屈強の農夫が少年のように小さく見えるのを。
一方でウーズ川が蛇行する起伏のない平原をなす
広い牧場には牛の群れが点在するが、
川はそのくねった道筋に沿って目を
楽しませる。また、土手にしっかりと根付いて

生える、かならず目に留まるお気に入りの榆の木立が、
ぽつんと立つ羊飼いの小屋を覆う。
また、ずっと向こうでは川越しに、
そしてその川は溶けたガラスのように流域を飾り、
傾斜する大地が雲に溶け込む。
変化に富んだ川べりをみごとに飾るのは
数知れぬ美しい生垣、方形の塔、
聳え立つ尖塔、そこからは陽気な鐘の音が
聴く者の耳に波打つ――
森と、野原と、煙の立ちのぼる彼方の村。
美しい光景は、毎日見ている
日ごとに美しく、その新鮮さは
長年知りつくし隅々まで見ている変わらない。
私がここに描く光景こそまさに称讃に値する。

(『課題』第1巻「ソファ」144-180行)

クーパーが「愛しい友」すなわちメアリーとともに、長年にわたって愛でてきた自然の風景の描写はここだけではないが、この一例からも多くのことが読み取れる。

これはイングランドで見られる典型的な田園風景である。ヨーロッパ大陸を南と北に分断するアルプス山脈の雄大な風景に比して、イングランドの風景、特に山のない南部と中部の風景は全体として緑の平野が支配している。もちろん、ウェールズには山があり、イングランドを北上するにつれてピーク地方があり、さらに北西に湖水地方の丘があり、スコットランドまで行けば高い山もある。いまクーパーが描いているのはイングランド中部の風景である。

この写実的叙景は、前の時代の詩に見られる叙景とは一線を劃している。先行する古典主義時代の詩は、ギリシャ・ラテン文学を下敷きにして、一語一語に古典文学への言及が隠されている。語法や文体においては、クーパーも古典主義時代の詩から完全に脱却しているとは言えないが、一つ一つの言葉は古典文学からの反響ではなく、現実の風景の中に実在する自然界の事物を直接叙したものであることは明瞭である。古典主義時代の詩にも風景描写は見られるが、そこでは木の精や水の精や半人半獣神などが慣習的に小道具として自然の中に混在する。それに対してクーパーの詩においては、自然は自然界の事物そのものとして描かれている。

イギリス文学の流れは同時代の絵画の流れとも並行する。イタリアでの修業が当然のこととされていた時代から、「王立美術院」の設立(1768)とともにイギリス画壇が大陸から独立した当初、主流は肖像画であったが、やがて風景画が台頭する。ター

ナー（J. M. W. Turner 1775-1851）とカンスタブル（John Constable 1776-1837）はともに風景画家として出発したが、晩年には大胆な光の線を駆使して幻想的空間を拡大したターナーに対して、カンスタブルは最初から最後までイギリスの田舎の風景を描き続けた。カンスタブルにとっては、イギリスの田舎の見慣れた風景の細部、例えば川に打ち込まれた一本の杭さえもが平凡ではなく、新鮮なものであった。クーパーの詩とカンスタブルの絵画に共通するものは、想像力によって「見慣れたもの」（familiar）を「見慣れないものにする」（defamiliarize）異化作用であると言える。

自然界での散策の記述と風景描写に混入された次の一節がある。

あの職人に幸あれ、その巧みなる頭脳が
考案した晴雨小屋、あの役に立つ玩具。
湿った大気の募る雨脚を恐れもせず、
踏み出す男、それは私の象徴、
もっと繊細で、臆病な伴侶は後退りする、
冬が野原を水浸しにする季節、女の足は
あまりにか弱く、べとつく粘土と抗うすべも、
小川を渡るすべもなく、家に留まるのが最善。
新たな発見の任務は私のもの。
そのような季節に、そのような任務を運び
かつて私は出かけた．．．

（『課題』、第1巻「ソファ」、210-220行）

「晴雨小屋」とは18世紀当時の単純な仕掛けの「晴雨計」のことである。模型の小屋では、一対の男女の人形がそれぞれ動物の内臓を乾燥させてつくった弦に繋がれている。乾湿の程度に従って、湿度が低い晴れた日には男の人形は小屋の中にいて女の人形が外に現れ、逆に湿度が高い雨天の日には、男の人形が小屋の外に現れ女の人形が中にいる仕組みとなっている。興味深いのは、「晴雨小屋」の人形が、クーパーとメアリーの比喩として用いられている点である。男女の性を超えた関係において、クーパーにとってメアリーは母あるいは姉の代役と言えるが、ジェンダーの観点からは、「繊細で」「臆病な伴侶」の足は「か弱く」「家に留まる」のに対して、自らは男性として「雨脚を恐れもせず」「新たな発見の任務」を運び出て行くのである。

その任務とは、すでに引用した一節で遠景の一部として見えていた楡に覆われた小屋——「農夫の巣」（‘peasant’s nest’, 227）——を観察することである。遠景として見えていた小屋は、楡で保護されて孤立し、喧騒から隔離されて平和な、理想の場所の象徴としてクーパーにとって羨望の的であった。

しばしば私はこの平和な隠れ家を所有したいと願った。
ここでなら、言ったとおり、少なくとも手に入れることができるのだ、
詩人の宝としての静寂を、そして恣に浸ることもできよう、
静穏で安泰な、空想の夢に。

(『課題』、第1巻「ソファ」、233-236行)

しかし、近くで見る現実には夢とは程遠い。高台にある小屋の主は低地まで水汲みに足を運ぶが、高台の家に帰着く時までには苦勞して運んだ水はこぼれてなくなり、パン屋の次の巡回までに蓄えが底をついて空腹をかこつこともある。「農夫の巢」を所有したいという願望は、もはやクーパーにはない。この挿話が暗示するように、クーパーの隠棲は、社会から完全に孤立し、遮断されることではない。

クーパーの散策は続き、オーニー近郊ウェストン (Weston) の地主、スロッキモートン (John Courtney Throckmorton 1753-1819) の私有地に到る (のちに、1786年以降、クーパーとメアリーはスロッキモートンの借家 [Weston Lodge] に移り住む)。

閉ざされた門が私の行く手を阻むことになる、
もしも、この囲われた敷地の領主が、
所有地の恵を他人にも伝えたいと、
私にも分かち与えてくれることがなければ。自然を觀る無心な眼は
無害なもので、眼が愛でる物を無駄にすることもない。
何と新鮮な変化！照りつける太陽は今いずこ、
あつという間に太陽の輝きが見えなくなり、
われわれはたちどころに涼しい場所に踏み入った。
伐り倒された並木！あらためて私は嘆くのだ
君たちの不当な運命を。同時にあらためて喜ぶのだ、
君たち檜の並木が一部でも生き残っていることを。
風を受けて何と軽やかにそよぐ優雅な梢のアーチ、
それでいて大聖堂の屋根のように畏怖を喚起し、
敬虔な頌歌をこだまさせる！その間、下方では
市松模様の大地が揺らぐ、まるで大波のように、
風を受けて。かくも身軽に戯れる陽の光、
枝を通して射し込み、枝が揺れれば光も揺れ、
影と光がすばやく混じり合う。
翳りそして輝く、木の葉が

気まぐれに戯れるのにつれ——一瞬一瞬、あちらでもこちらでも。

(『課題』、第1巻「ソファ」、330-349行)

18世紀中葉イギリスでは、中世以来つづいた共同利用地が大土地所有者によって囲い込まれて私有化された「囲い込み」により、追われた小作人は産業革命下の新興産業都市に労働人口として流入した。結果として田舎の疲弊と都市化が招来されていた。引用したこの一節も、伐り倒された森の並木の描写を通じて、エコ批評の趣がある。さらに興味深いのは、並木の梢が大聖堂の天井を、木漏れ日がつくる地面の市松模様は大聖堂の床のイメージを喚起する巧みな比喩的描写によって、自然の崇高美が暗示されており、同時代の自然観の一端が読み取れるのである。

「フローラ (Flora [花と豊饒の女神]) が支配するところでは憂鬱 (Spleen) は無縁」(455行) とクーパーは言う。「憂鬱」や「病」は都会の奢侈、歓楽、遊興の産物と考えられている。たしかに、クーパー自身の憂鬱症の痕跡は『課題』には示されていない。そうした中で、自然の風景の一部として、広野を彷徨う一人の女の姿が浮かび上がる。詩人による語りを要約すると、水夫となった恋人が水死したことも知らぬまま、いつまでも待ち続ける女のもとに悲報が届けられる。その結果、今の女の姿がある。

ボロボロのエプロンが

マントのかわり、その下に着たガウンは

さらにボロボロ。そのまた下に半ばはだけた

白い胸が、止まぬ溜息で波打つ。

会う人ごとにねだるのは、役にも立たぬ針、

もらった針は袖に貯め。欠かせぬ食べ物も、

あんなに空腹のはずなのに、さっぱりとした着る物も、

あんなに寒いはずなのに、ねだることもない。哀れ、ケイトは狂女。

(『課題』第1巻「ソファ」546-556行)

薄幸の女性を主題とする詩が同時代に流行したが、ここでは絵画的とも言える的確な写実性が単なる流行と慣習を超えている。反面、次世代のワーズワース (William Wordsworth 1770-1850) が同じ主題を扱う場合のように、対象となる人物に対する詩人の感情移入は見られない。クーパーの描写においては、自分自身の憂鬱と潜在的狂気をそのまま詩に投入するのではなく、狂女に転化して距離を置き客観化している。

狂女の挿話に続き、風景の一部として、野営するロマの人びとの姿が描かれる (557-591行)。クーパーは、これらの人びとが自然の中で、粗食、貧困、寒さに直面しながら健康に暮らしている事実を認める一方、他方でその生き方が文明からの逸脱

であることを暗示する。その意味でクーパーは、ジャン＝ジャック・ルソーの「高貴な野蛮」の考えとは一線を劃し、それはさらに、「オーマイ」(Omai)の挿話(592-677行)に受け継がれる。オーマイは1774年、キャプテン・クックの第二次航海にさいしてタヒチ島からロンドンに連れて来られ、ロンドンの社交界に珍客として迎えられたが、1776年、クックの第三次航海にさいしてタヒチに送還された。クーパーは送還後のオーマイが記憶の中の文明を懐かしむ姿を描くと同時に、利得という大義名分のない今、イギリスが二度とオーマイを連れ戻すことのない事実を、皮肉たっぷりに指摘する。

以上のような前提に立ってクーパーは第1巻の最終部で、イギリスの都会を代表するロンドンに関して、芸術や科学の隆盛を讃える一方、他方で悪徳、奢侈、政治の腐敗などを攻撃する。そしてクーパーは主張する——「神が田舎をお造りになり、人が町を作った」(‘God made the country, and man made the town.’ 749)。都会は人為によって墮落した場所、自然は神の手になる神聖な場所という二項対立がクーパーの主題である。ただ繰り返し言うと、クーパーにとっての自然とは、都会の対極でありながら、野生ではなく人によって宥められた穏やかな自然である。

『課題』を全体として見ると、周到な構造計算の上に成り立っている。自然讃歌としての第1巻に続くのは、自然界の天変地異を、人間の不正に対する神の警告と終末の予兆として読み取る第2巻(「時計」‘Time-Piece’)。自然を耕作し庭を造る詩人の行為が、地上の楽園の探求として読み取れる第3巻(「庭」‘The Garden’)。木枯らしの吹きすさぶ戸外と対比された屋内の平和と安泰が描写される第4巻(「冬の夕べ」‘The Winter Evening’)。夜が明けて、詩人は再び戸外へと出向く第5巻(「冬の朝」‘The Winter Morning Walk’)。その延長として、キリストの支配する神の王国としての新エルサレムの再来を予見する最終第6巻(「真昼時の冬の散歩」‘The Winter Walk at Noon’)で結ばれるように、構成上の意図は明白である。

『課題』全篇を通じてクーパーは、観察した田舎の自然の姿を描いているが、第5巻「冬の朝の散策」で、信仰によって精神の自由を得、真理を体現する「自由な人」(freeman)と自然との関係を次のように規定する。

自由な人は自然の彩り豊かな広野を見渡す、
それは貧しいものかもしれない、比べてごらん、
目の前で大邸宅がキラキラと輝く光景と。
だが、いま眼にする光景はすべて自分自身のもの、
山も、谷も自分のもの、
それに陽に輝く川も。自分が享受するのは
他の誰も感ずることのできない自分だけの権利、

自分こそは神の子としての自信を内心に感じ、
天に向かって謙虚な眼を向けることができ、
微笑みながら言うことができる——自然をお造りになったのは父なる神！
自然は固有の権利によって自分のもののはず、
自分自身の固有の利権によって自分のもののはず、
自分の目を自然は神聖な喜びの涙で満たし、
自分の心を称讃で満たし、自分の高められた精神を
倦むことのない愛に対する価値ある思いで満たす——
その愛こそがお考えになり、お建てになり、つねにお支えになる
かくも美しい装いをした世界、背く心を持った人間のために。
(『課題』、第5巻「冬の朝の散歩」、738-754)

この一節でクーパーは、創造者としての神と、神の被造物としての自然とを区別することによって、自然自体に神が宿ると考える汎神論と一線を劃している。次に、ここで示されているのが、貴族の館が輝いて見える自然ではなく、つつましい自然であることに注目する必要がある。山、谷、川など具体的な自然のイメージは、やがてワーズワースがその詩の中で繰り返し用いることになるものである。比較して言えば、ワーズワースもまた、未完の長篇詩『隠遁者』(The Recluse)の構想(‘Home at Grasmere’)の中で予告したように、「太古の〔アトランティスの〕深海の／楽園、エリジウムの森、幸せの島と広野」(996-997)ではなく、「個人の精神が・・・外界と適合した」(1006-1009)状態を歌うことを目指していた。一度ならず崩壊した「精神」と「外界」との調和こそは、憂鬱と狂気の再発を恐れながらクーパーが求め続けたものであったが、調和を回復して『課題』の中で歌うことこそ、クーパーにとっては癒しであり救いとなったとすることができる。

＊

1787年、クーパーは第4回目の憂鬱症を発症するが、先に触れたように、1780年前後を境に、クーパーの実生活に変化が生ずるとともに、それが契機となって代表作を含む豊かな創作活動に没頭したことを、第3回目の発症からの間隔が延びた外的要因として考えることが可能である。それに対して、1794年の第5回目の発症は、第4回目からの間隔が短く、1791年のメアリー・アンウィンの発病とその後の病状の悪化が外的要因として考えられるが、クーパーが完全に立ち直ることはもはやない。

活発な創作活動が第4回目の発症を遅らせたが、それでもなお、慢性化した憂鬱症にクーパーが取りつかれていた事実には変わりはないことが書簡から伺える。憂鬱症と詩作との興味深い関係についてクーパーは語っている。

憂鬱のどん底で、私は『課題』とその前の作品『ジョン・ギルピン』を書きました。

(『書簡・散文集』第3巻、121頁、1788年3月3日付、キング夫人宛)

『課題』執筆の年、(というのは約一年を要したから、)私は概してこれ以上ないくらい気分がすぐれませんでした。それ以上に悪くならなかったのは、神のご加護を賜り、あの作品が書け、そのおかげが大きかったためなのです。

(『書簡・散文集』第2巻、456頁、1786年1月16日付、ヘスセス夫人宛)

クーパーのことばは、『ジョン・ギルピン』も『課題』もともに、憂鬱症のさなかに書かれたという事実だけでなく、詩作が憂鬱症の緩和のために必要であり、憂鬱症の緩和に貢献したこと、詩作が癒しであり救いであったことを証明する。

・・・精神の落ち込みは、多くの人が作家となることを妨げたのに対して、私の場合には、私を作家にしてくれたのです。絶えず仕事をしていることが必要であり、従っていつも仕事をしているように気を配ります。・・・創作、[とりわけ]詩の創作により、精神集中ができるのです。

(『書簡・散文集』第2巻、382-383頁、1785年10月12日付、ヘスセス夫人宛)

そのような精神状態で、まったくの絶望の闇夜に閉ざされ、何千回となく口にも出せない恐怖に満たされて、私は作家として門出しました。苦痛が私を創作に駆り立て、何か打ち込むものなしには生きていけないので、いつも創作の仕事が有益なのです。

(『書簡・散文集』第2巻、548頁、1786年5月20日付、ジョン・ニュートン宛)

ここで思い出されるのは、『文学論』「序」にある漱石の次のことばである。

・・・たゞ神経衰弱にして狂人なるが為め、「猫」を草し「漾虚集」を出し、又「鶉籠」を公にするを得たりと思へば、余はこの神経衰弱と狂氣とに対して深く感謝の意を表するの至当なるを信ず。

クーパーの書簡のことばが率直に真情を吐露したものであるのに対して、斜に構えた漱石のことばは自己の異常心理と創作との関係をユーモアで塗布して語ったものである。しかし両者に共通するのは、異常であるが故に創作行為が必要であり、創作が癒しと救いに貢献した事実、さらに言えば異常心理が創作行為を促したという事実であ

る。クーパーと漱石は個人としての性格のタイプが異なるのみならず、18 世紀末のイギリス詩人と 20 世紀初頭の日本人作家という、時間的・空間的隔たりとジャンルの違いもあるが、ともに心の深淵に闇を抱えた作家であり、そこに共通する創作心理と創作過程を垣間見ることができるのである。

【引用文献】

Cowper, William. *Poems of William Cowper*, eds. John D. Baird and Charles Ryskamp. Oxford: Clarendon Press, Volume I. (1748-1782), 1980; Volume II. (1782-1785) and Volume III. (1785-1800), 1995.

———. *The Letters and Prose Writings of William Cowper*, eds. James King and Charles Ryskamp. Oxford: Clarendon Press, Volume I. ('Adelphi' and Letters 1750-1781), 1979; Volume II. (1782-1786), 1981; Volume III. (1787-1791), 1982; Volume IV. (1792-1799), 1984; Volume V. (Prose 1756-c.1799 and Cumulative Index), 1986.

———. *Memoir of the Early Life of William Cowper, Esq, written by himself and never before published* (London: Printed for F. Edwards, 1816), ed. With an introduction by Maurice J. Quinlan, *Proceedings of the American Philosophical Society*, 97 (1953), 359-82; 'Adelphi', *The Letters and Prose Writings of William Cowper*, I, 1-61. 本稿で引用する『回想記』は後者に依拠し、その頁数を表記する。

Freud, Sigmund. *Jokes and their Relation to the Unconscious* (1905), *The Complete Psychological Works*, eds. James Strachey and Anna Freud, VIII. London: The Hogarth Press, 1960.

———. 'Mourning and Melancholia' (1917), *The Complete Psychological Works*, XIV. London: The Hogarth Press, 1957.

James, William. *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, [The Gifford Lectures delivered at Edinburgh in 1901-02] London: Longmans, Green, & Co., 1902.

Ryskamp, Charles. *William Cowper of the Inner Temple, Esq.: A Study of the Life and Works to the Year 1768*. Cambridge: Cambridge University Press, 1959.

Wordsworth, William. *Home at Grasmere*, ed. Beth Dartington. Ithaca: Cornell University Press, 1977.

夏目漱石 『漱石全集』全 29 巻 岩波書店 1993-2004

【图版】



图 1

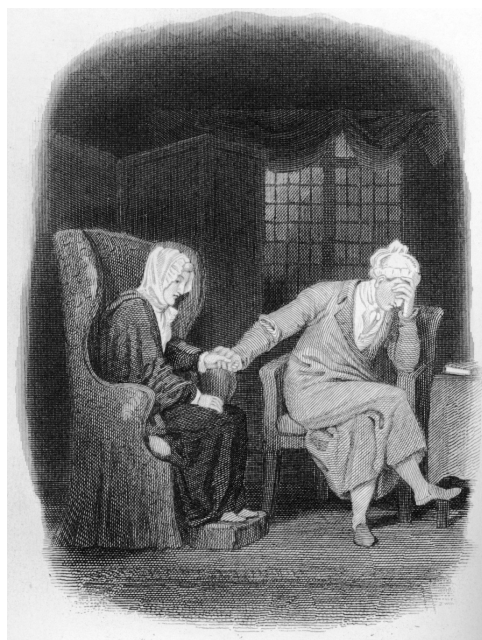


图 2



图 3

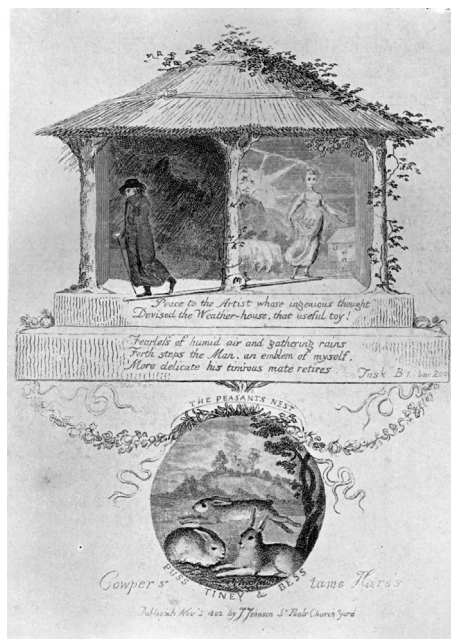


图 4

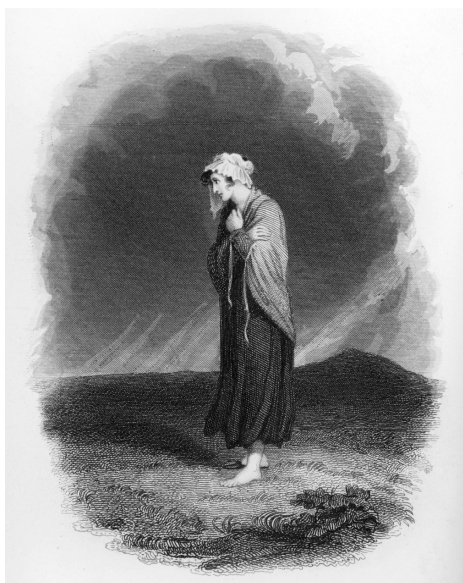


图 5

1. William Cowper: From a miniature by William Blake after the portrait by George Romney.

2. Thy hands their little force resign,
Yet gently prest press gently mine
My Mary!

3. Lady Austen: From an engraving by H. Robinson after a drawing by W. Harvey of the original by George Romney.

4. The weather-house, the peasant's nest, and Cowper's hares: From a drawing by William Blake, engraved by him for Hayley's *Life of Cowper*.

5. A tatter'd apron hides,
Worn as a cloak, and hardly hides a gown
More tatter'd still; and both but ill conceal
A bosom heaved with never-ceasing sighs.
She begs an idle pin of all she meets,
And hoards them in her sleeve; but needful food,
Though press'd with hunger oft, or comelier cloathes,
Though press'd with cold, asks never. —Kate is craz'd.

Poetic Creation as a Cure and Relief: The Mind's Abyss of William Cowper (1731-1800)

【Abstract】

The present paper aims to investigate into the psychological process of poetic creativity with reference to the English poet William Cowper (1731-1800) who suffered from chronic melancholy and underwent at least five mental breakdowns in 1753, 1763, 1773, 1787 and 1794. It is in a way a modest attempt at pathography. The paper consists of three sections: (1) an analysis of the poet's own *Memoir* (unpublished during his lifetime) in which he traces the history of his first and, with greater emphasis, his second and more serious breakdown of 1763 leading to his attempted suicide, and shows how he recovered from it after having experienced an Evangelical conversion; (2) an account of his secluded life from 1764 to 1780, which was built on a perilous balance between multifarious elements such as his faith in Evangelicalism as inculcated by his rigorous mentor Rev. John Newton, his spiritual and asexual relationship with Mrs. Mary Unwin, and his short-lived friendship with Lady Austen who inspired him with a motive for writing poetry; and (3) a discussion of some important aspects of his masterpiece *The Task*, e.g., the ways in which he observed Nature in the countryside and rendered into poetry what he observed. From these analyses and discussions will emerge a thesis that Cowper composed his poetry in the middle of his chronic melancholy or despite it, that he needed to do so to relieve it, that his act of writing poetry, in fact, proved to be conducive to this purpose, and that melancholy, agonising though it was to him, in a sense contributed to making him a poet.